

渋川市域における天明泥流到達範囲

— 天明三年浅間災害に関する地域史的研究 —

関 俊明¹⁾・小 菅 尉 多²⁾・中 島 直 樹³⁾・勢 藤 力⁴⁾

¹⁾(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・²⁾国土防災技術株式会社技術本部・

³⁾玉村町教育委員会・⁴⁾伊勢崎市教育委員会

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. はじめに | 5. 踏査確認地点 |
| 2. 方法と用いた絵図史料等 | 6. 天明泥流到達範囲図 |
| 3. 渋川市の立地と環境 | 7. まとめと課題 |
| 4. 発掘調査事例と想定線 | |

— 要 旨 —

被害から231年が経過した天明三年浅間災害は、約1,500名に及ぶ犠牲者を出した歴史災害である。筆者のうち関・中島・勢藤の3人は発掘調査を通じてこの災害に関わり、小菅はこれまで天明泥流に対して水理学的な検討から、流下の解析を試みている。検出された遺跡や砂防分野の事項に限るのみではなく、史料や供養塔などの存在をはじめ、語り伝えられてきた多くの教訓や幾種類もの語り継ぐべき項目があることを感じつつ、浅間災害に関して領域外からもこの出来事を語り継いでいこうという考えを一にしている。

本稿は、天明泥流の痕跡を確認し語り継いでいくべき今日的な課題として、実質レベルでの到達範囲とそれに関わる伝承や踏査による地点情報を集約していくとするものであり、群馬県内を貫く利根川と支流の吾妻川を襲った天明泥流被害に関する基礎資料として、天明泥流堆積物の分布を都市計画図レベルでたどっていく作業のとりまとめである。これまでに、玉村町・伊勢崎市域については、関・中島(2005)、関・勢藤・中島(2013)、前橋市・高崎市・吉岡町域については、関・中島・勢藤(2014)で取り組んできた。本稿では、渋川市域についての継続的な取り組みである。過去の災害を正確に伝え、地域の歴史の一断面をたどれる資料として、ささやかながらではあるが、広域的に取り組んでいこうと考えるものである。

社会変化の中で、伝統や伝承が途絶えようとしている今日、地域史的な視点を忘れずに作業に取り組みたいと考えている。時間の制約や検討の不備については、改めて諸氏にご協力を願い叩き台とするべく今後も作業を継続させていきたいと考えるものである。

キーワード

対象時代 江戸時代・天明三年

対象地域 渋川市

研究対象 天明三年浅間災害・天明泥流

1. はじめに

本稿で扱う天明三年（1783）浅間災害は、新暦8月5日（以下、新暦を算用数字）午前の浅間山噴火で発生した吾妻川と利根川を流下した天明泥流による被害である。ここでは数時間後に被災した渋川市域における泥流被災範囲の確定を目指すものである。

吾妻川下流域から合流点以降の利根川中流域のこの範囲は、天明泥流が被害をもたらしながら流下した沿岸のうちでも、発掘調査事例の比較的充実する地域の一つでもあるが、圃場整備の早い時期からの実施などから、現地形から読み取るのは困難な場所も多かった。

該当地域では、早い時期から国道17号のバイパス化など周辺地形の地形改変などがなされてきた。詳細な情報は、発掘調査報告書の刊行によるところも大きいが、この地域の被害状況を復元するには大いに参考となるものと考えられる。

今回の泥流被災範囲の確定は限られた時間のなかでの取り組みであり、悉皆調査にはいたらなかったが、2014年4月26日利根川・吾妻川右岸側、5月24日吾妻川左岸側、7月25日利根川上流側右左岸の現地踏査を通して集約できた情報で、関係する伝承や被害にかかる事項を地点情報として盛り込んだ。

2. 方法と用いた絵図史料等

天明泥流の到達範囲を決定するために以下の事項を検討した。

①古記録による泥流到達記録内容と位置の現地確認とその信憑性（現在の河床との比高差、流れの連続性）

第1表 火石泥入り被害

		祖母島	村上	小野子	川島	南牧	北牧	白井・戸鹿野	吹屋	下金井(金井駅)	中村	渋川村	樽	草(?)木原	下原田	栗谷	
1 『浅間火記』による	流失家		24	10	125	25	147									1	不知
	流死人		3	9	113	5	55										8
	流死馬				28		60										
	泥入	畑泥入	250		580	70	160	畑泥入	大泥入		大泥入			泥入			
2 本多夏彦写[無題]による	流失家	25	100		133	27	63		2		67	2					
	流死人		5		136	6	53				30	2					
	流死馬		5	5	36	7	3			畑4町	13						
	泥入							泥入		山林3反		大崎泥入	泥入				
3 曽根出羽「浅間山大変日記」・相川氏本「浅間山大変日記」による	流失家	17		11(17)	50												
	流死人				1	128	103										
	流死馬				1												
	泥入																
4 「信上陽浅間記」による	流失家		17		150	103											
	流死人		1														
	流死馬		6														
	泥入																
5 「浅間山焼に付見聞覚書」等の記録・古文書による	祖母島		村上	小野子	川島	南牧	北牧	白井	吹屋	金井	中村	渋川	半田	阿久津			
	被害家屋	27	24	12	127	24	133				74		42				
	死者	3	1	123	6	53				2	24		9				

注) 1~4は北群馬渋川の歴史編纂委員会 1971による。5は古澤勝幸 1997より整理。

3. 渋川市の立地と環境

日本列島のほぼ中央に位置し、日本のへその一つといわれる渋川市は、西にそびえる榛名山の裾野に位置し、東に赤城山を望み、北には子持山と小野子山がそびえて

②泥流堆積物の存在

③地表面に分布する浅間石の存在

天明泥流到達範囲図作成にあたり、天明泥流堆積物の流下範囲を想定した先行文献あるいは、関連する地図資料・絵図史料として参照できたもの、あるいは、参照できるという情報が得られたものは、以下の通りである。

- ① 明和元年（1764）「川島村絵図」（川島区有文書 甲波宿祢神社）
- ② 安永八年（1779）の「訴訟方川島村・相手方渋川村…」の絵図（川島区有文書）
- ③ 天明二年（1782）の荒地御改の「麓絵図」（川島区有文書）
- ④ 天明四年（1784）「中村村絵図」（中村区有文書）
- ⑤ 安政三年（1856）「浅間焼吾妻川利根川泥押絵図」（群馬県立歴史博物館所蔵）
- ⑥ 「天明三年浅間山押出 火石入泥押絵図」（元岡岸良一氏蔵 岸益男氏複写）
- ⑦ 「吾妻川通大変の絵図」（入沢柳太郎家所蔵）

踏査においては、どれだけ当時の地形が残されているかは大きな鍵となるのはこれまでと同様である。当該地域では、比較的地形の変容が少ないと思われ、当時の地形景観を伝承や踏査により復元することが可能と考えられる。旧地形の土地利用状況の明瞭な『フランス式彩色絵図』による明治期の土地利用は残念ながら、対象外地域となっており、活用にはいたらなかった。

被害人数や「泥入り」の統計を見ておくことも、踏査時に参考とすることができた。当該地域については、『北群馬・渋川の歴史』と古澤勝幸氏による火石泥入り被害の一覧がまとめられており、第1表に引用する。

いる。北から利根川、西から吾妻川が流れ、市内白井の落合で合流する。市域では、およそ吾妻川9km、利根川15kmが流下している。そのうち合流後の利根川は5km分が南に向かって流れる。標高は、139m（旧渋

川市) から、1,565m (旧赤城村) に位置する。

渋川市は、古くから三国街道の宿場町、交通の要所として栄えた。明治 22 年 (1889) の町村制施行により、西群馬郡に渋川町・金島村・古巻村・豊秋村が誕生し、昭和 29 年 (1954) に北群馬郡渋川町・金島村・古巻村・豊秋村の 1 町 3 村の合併で、(旧) 渋川市が発足した。平成 18 年 (2006) 2 月に (旧) 渋川市と北群馬郡伊香保町・小野上村・子持村、勢多郡赤城村・北橘村の新設合併により、市域が広がり面積 240km² (農地 20%、

宅地 8 %、山林 30%、その他 42%)、人口 8.1 万人、3.17 万世帯 (平成 26 年 7 月末) の現在の渋川市となった。

近年、全国に注目されている榛名山二ツ岳の 6 世紀の噴火で被災した遺跡群の事例とは別であるが、渋川市域においては、近世の歴史災害を発掘調査でたどることの先鞭をつける事例となった中村遺跡や伝承を裏づける甲波宿祢神社の元社 (もとやしろ) がみつかった久保内・馬場遺跡の発掘調査事例などの天明三年浅間災害遺跡の調査事例が蓄積されている。

4. 発掘調査事例と想定線

(1) 発掘調査事例一覧

渋川市域内では、中村遺跡などをはじめ 13 の遺跡で

天明泥流の堆積が確認されている。

第 2 表 天明泥流が確認された事例

番号	遺跡名	所在地	概要	泥流厚 (cm)	備考
S001	川島久保内・馬場遺跡	渋川市川島	神社跡	約 100	渋川市教育委員会 1996 『市内遺跡Ⅸ』 渋川市教育委員会 1998 『川島久保内・馬場遺跡』
S002	川島地内	渋川市川島	泥流の存在を調査時に確認。	200	渋川市教育委員会 2010 『渋川市市内遺跡Ⅲ』
S003	東町閔下遺跡	渋川市渋川	畠跡	約 400	(財) 群理文 1998 『東町閔下遺跡』
S004	下小野子宮ノ下遺跡	渋川市小野子	水田跡	120	渋川市教育委員会 2011 『渋川市小野子地区埋蔵文化財詳細分佈調査報告書』
S005	北牧地内	渋川市北牧	水田跡	300	平成 12 年度実施試掘調査
S006	北牧地内	渋川市北牧	水田跡	150 ~ 200	平成 16 年度実施試掘調査
S007	北牧地内	渋川市北牧	水田跡	150 ~ 200	平成 8・10・14 年度実施試掘調査
S008	中村日焼田遺跡 (A・B 区)	渋川市中村	水田跡等	約 50 ~ 100	渋川市教育委員会 1991 『石原東遺跡・中村日焼田遺跡』
S009	中村久保田遺跡	渋川市中村	水田跡等	約 50 ~ 100	渋川市教育委員会 1993 『石原東遺跡・中村日焼田遺跡・中村久保田遺跡』
S010	中村遺跡	渋川市中村	水田跡等	約 300	渋川市教育委員会 1986 『中村遺跡』
S011	八木原沖田遺跡※	渋川市八木原	泥流の存在を調査時に確認。報告書には未掲載。	300 以上	
S012	半田若宮遺跡	渋川市半田	水田跡等	約 300 ~ 400	渋川市教育委員会 1998 『半田若宮遺跡』
S013	半田常法院遺跡	渋川市半田	溝、土坑等	100 弱	(財) 群理文 2011 『阿久津遺跡・万歳寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡・半田常法院遺跡』

第 3 表 天明泥流が確認されなかった事例

番号	遺跡名	所在地	概要	泥流厚 (cm)	備考
(S001)	川島岡貝戸地内	渋川市川島	表土下 Hr-I 降下堆積層	—	渋川市教育委員会 1994 『市内遺跡Ⅶ』
(S002)	坂下遺跡	渋川市渋川	表土下 Hr-I 降下堆積層	—	渋川市教育委員会 2010 『坂下遺跡』
(S003)	渋川 (東町梅ノ木) 地内	渋川市渋川	表土下 Hr-I 降下堆積層	—	渋川市教育委員会 2004 『市内遺跡 17』
(S004)	鯉沢瓜田遺跡	渋川市吹屋	表土下 Hr-I 降下堆積層	—	子持村教育委員会 2000 『鯉沢瓜田遺跡』
(S005)	吹屋瓜田遺跡	渋川市吹屋	表土下は As-B を含む黒色土	—	(財) 群理文 1996 『吹屋瓜田遺跡』
(S006)	白井二位屋遺跡	渋川市白井	表土下 Hr-FP 降下堆積層	—	(財) 群理文 1993 『白井遺跡群 - 中世編 -』
(S007)	中村前田地内	渋川市中村	遺構・遺物は確認できなかった。	—	渋川市教育委員会 1998 『渋川市内遺跡 XI』
(S008)	中村岡前遺跡	渋川市中村	表土下 Hr-I 淍水堆積層	—	渋川市教育委員会 2001 『中村岡前遺跡』
(S009)	半田町田地内	渋川市半田	遺構・遺物は確認できなかった。	—	渋川市教育委員会 2005 『市内遺跡 19』
(S010)	半田蒼路地内	渋川市半田	表土下 Hr-I 淑水堆積層	—	渋川市教育委員会 1990 『市内遺跡 III』
(S011)	田尻遺跡	渋川市北橘町八崎	耕作土下 Hr-FP 級層	—	北橘村教育委員会 1999 『八崎の寄居・田尻遺跡』
(S012)	下箱田向山遺跡	渋川市北橘町下箱田	耕作土下に Hr-FP を含む層	—	(財) 群理文 1990 『下箱田向山遺跡』

(2) 踏査による到達ライン推定

①吾妻川・利根川右岸側

a. 現在の J R 金島駅周辺の一部造成された地形などを除き、通称県道日陰道下に分布する低位段丘面を到達範囲として考えていくことができるだろう。

b. 国道 17 号と信号「金井入口」の北付近～十王堂～金井用水路の段丘崖が到達の縁辺で、浅間石の岩片を含む耕作土と榛名二ツ岳軽石層を耕作土とした特徴的な畠地などとの対比が確認される。それ以降、利根川との合流点までの吾妻川右岸では、国道 17 号側の右岸段丘崖を到達範囲と確認することができる。

c. 利根川合流点から中村の集落にかけての到達範囲は、概ね国道 17 号のバイパスを前後するものと考えられ、

上流側は、現在の国道 17 号沿いに存在する低位段丘面に添って、到達ラインを推定することができる。

d. 中村早尾神社周辺、関越自動車道渋川伊香保インターチェンジ～吉岡町にかけての到達範囲は、大同特殊鋼の東側擁壁沿いに明瞭な範囲を確認することができ、半田早尾神社から西側の現況水田段差など、微高地形をたどるように現況を確認することができる。周辺では、中村遺跡をはじめとして、いくつかの発掘調査事例があり、そこからも右岸側を押し拵がりながら流下した痕跡を踏査で確認できる。

②吾妻川・利根川左岸側

a. 横堀にある佐藤家墓所周辺の地形は、榛名二ツ岳軽石の混じる畠と天明泥流堆積物が混じる畠とが混在し、

泥流到達ラインを単純に引くことはできない。北側から流入する小支渓の流出土砂で形成された土石円錐状の微地形に影響されて天明泥流が堆積しているのではないかと推定される。

b. 左岸寄島～白井尖野にかけての段丘境がその到達域と考えられる。史料の「尖野」近辺の記述（「白井とがの門左衛門殿門の外へどろ上り申候。それより利根川へ押出し利根川ヲ上ミヘ差（着力）上ケ、…」（「勢多郡津久田村の万留」）（萩原 1995）を読み解くことが踏査では明らかにできなかった。

c. 利根川合流点上流域には、史料に見る「樽塔ヶ渕」までの逆流は充分に考えられる。利根川左岸の舟戸の渡し跡附近から望むゆったりとした流れは、利根川合流点の当時の泥流の逆流現象の想像をし易くする。

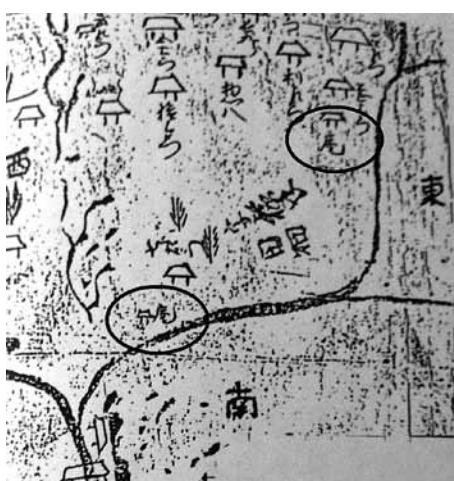
d. 合流点附近の利根川左岸分は、渋川市北橋八崎の舟戸の集落内では、標高 180～185m の付近東京電力技能訓練センター東裏手の土手線が付近の到達ラインと考えられ、それ以降、坂東橋にかけて段丘崖を越えることはない。

5. 踏査確認地点

（1）吾妻川・利根川右岸側

S-A 横手の庵跡

「当月八日 吾妻川俄火石泥水一旦ニ押掛ケ川通田畠家居押流候処 麓絵図」（福島右二家蔵）には、「庵」が 2 つ描かれ（第 1 図）、祖母島番所下の字横手地区で、泥押しで全戸が流された場所と記され、現在、横手地区で庵があったといわれるところは、祖母島 358 番地横手正守宅西の墓地で、宝永八年の閻魔大王の石像や無縫塔などがあり（渋川市市誌編さん委員会 1993）、付近のみが泥流の襲来を免れた場所と伝えられている。



第 1 図 2 つの庵 丸印の場所に「庵」の文字が見える。この周辺以外は泥押しで全戸が流された（渋川市市誌編さん委員会 1993 より引用）。

S-B 祖母島村の被害

祖母島村の被害状況は、年貢割付の際の泥火石入田畠の減免の反別記録で、9,174 畝のうち 447 畝といい、5 % の被害が書き付けられていて（北群馬渋川の歴史編纂委員会 1971）、狭長な川縁の田畠の多くが被害にあっている。浅間押しでは、25 軒の民家が流失という。現在の J R 祖母島駅沿いの線路西側の高台付近まで天明泥流は及んでいると思われる（写真 1）。



写真 1 線路西側の高台 写真手前に J R 吾妻線が走り、その奥側に高台が分布するがここまで天明泥流は到達した。

S-C 川島村

川島村は、北群馬・渋川地域で最も被害が甚大であった。石高 686 石中 580 石の泥入、流死 113 人、125 軒の流失と 4 軒の潰れ、土蔵 12 軒の被害が、疋間村佐鳥唯法写「浅間山焼泥押記」に記されている。また、根岸九郎左衛門宛の「願上」では、無難の百姓 40 軒余りに夫食種代の拝借を願い、鎮守の宿祢大明神、天台宗福生寺が流失し、寺僧は流死したので、高台に引移りたいこと、屋敷を高台に移すと水がないので用水の御普請を願い上げている（北群馬渋川の歴史編纂委員会 1971）。明和元年（1764）「村絵図」（川島区有）には、「観音堂・宿祢神社・諏訪神社・福生寺・天神・伊勢」の諸寺が描かれ、安永八年（1779）の「訴訟方川島村・相手方渋川村…」の絵図（川島区有）、天明二年（1782）の荒地御改の「麓絵図」（川島区有）などでも、被災前の川島村の姿を知ることができるという（渋川市市誌編さん委員会 1993）。

現在の J R 金島駅周辺の一部造成された地形などを除き、通称日陰道下に分布する低位段丘面が、到達範囲として考えていくことができるだろう。

S-D 金島の浅間石と周辺の浅間石

「金島の浅間石」（群馬県指定天然記念物、長軸約 15m）は、天明泥流で運ばれてきた巨大な岩塊で溶岩塊である（写真 2）。古文書にこのような大小さまざまな浅間石が、高温の状態を保っていたことが見分され記載されている。「少々之沢水出候川筋えは余程高キ所迄

も火石走り込、…水氣有之所えは、水火相激候て走候儀と存候由、老人共何れの村々ニても申之」(「浅間山焼に付見分覚書」) (萩原 1986) というように、泥流が流下したところには、かなり高い位置まで、水面を浮上するホバークラフトのように泥流中を水煙を上げながら水面を浮上して流れいく火石の様子までもが聴取されている。これは、発掘調査で確認する天明泥流堆積物中の浅間石は、意外にも天明三年の地表面の直上に残されているのではなく、2m以上もの巨大な岩塊が吃水深数10cm程度で泥流堆積物中を浮いた状態で確認できることとも整合している。

このような巨大岩塊がどのようにして浅間山から約60~70kmも下流まで運搬されてきたのか水理学的な説明はできていない。

かつて残されていた浅間石をあわせると、同様な巨礫



写真2 金島の浅間石 群馬県指定天然記念物(昭和27年11月11日指定)高さ4.4m、直径15.75m×10.00mの溶岩塊である。



第2図 天明泥流の流下域の浅間石の分布(中村1998)示された浅間石のいくつかは現在見あたらない。

は当地区に相当数存在したと思われる。近年の開発や造園などでの売り買いで失われてしまったといわれる。中庄村八氏は、1997年初頭に、泥流とともに移動してきた浅間石が付近の農耕地内で、川砂利採石にともない破壊され、また、庭石として持ち去られていることを知り、現存する浅間石すべての産状を記録する、調査を開始した(中村 1998)。周辺には「金島の浅間石」を含め、現在巨大な岩礫12個が調査されている(第2図)。

S-E 柴原観音

明和元年(1764)の「村絵図」には、吾妻川畔の字舞台に「観音堂」が描かれ、これが柴原観音であるという。柴原観音は泥流により被災した。現在の観音堂は、再建されたもので上越新幹線の橋脚の下にあたるため、昭和50年に東へ曳移転され、その際に銅板葺きに改修されたものである(写真3)。棟札によれば、文化二年(1805)に再建されたものとみられる(渋川市市誌編さん委員会 1993)。



写真3 1805年再建の柴原観音 元の柴原観音は天明泥流により被災した。

S-F 甲波宿祢神社・元甲波宿祢神社(川島久保内・馬場遺跡)

川島久保内・馬場遺跡(渋川市教育委員会 1997)は、吾妻川右岸の段丘上面に位置し、上越新幹線がすぐ西側を走っている。市内の業者が遺跡を含む7,000m²の畠で砂利採取を予定したため、渋川市教育委員会が試掘調査をおこない、2mの天明泥流堆積物下で南北13mの社殿の基壇を確認し、1997年1月20日~3月31日にかけて発掘調査がおこなわれた(写真4)。屋根や柱材などの建築部材は残されてはいなかった。「延喜式神名帳」に所載される上野十二社のうち四之宮にあてられている甲波宿祢神社は現在、川島の高台に所在している。社には、846年の「無位」から「從五位下」昇叙の記録がある。江戸時代の記録は、天明三年の浅間押しによってほとんどなくなっているが、複数の絵図が残されている。明和元年(1764)の「鵜飼左十郎様御役所宛絵図」

(川島区有)には、(柴原)観音堂・諏訪神社が並んで描かれ「古川・寛保二戌年迄の図」と書き添えがされている。安永八年(1779)の「訴訟図」(川島区有)や天明二年(1782)の「原田清右衛門様御役所宛龜絵図」(川島区有)にも、吾妻川沿いに同社と思われる社が描かれている。同社は、天明三年の浅間押しにより流失した。明治十三年の「神社明細帳原簿」(県立文書館蔵)には、「天明三年壬(ママ)卯浅間山焼崩之時社殿悉皆流失シ旧記滅亡、由緒并勧請年月不詳、天明五年甲(ママ)巳年九月十九日再建」とあり、天明五年に南大塚の現在の地に再建されたことがわかる。現在、神社宮司の宮本家は、埋もれた社跡を「もとやしろ」と呼んで祀っている。天明六年五月十三日ここを通った奈佐勝臈は、「山吹日記」の中で、再建された甲波宿祢神社と流された逸話を紹介している(渋川市市誌編さん委員会 1993)。



写真4 1997年発掘された甲波宿祢神社跡 約2mの天明泥流堆積物によって覆われていた。

S-G 福性寺跡

「東八十八ヶ所二十四番」の天台宗福性寺は、天明泥流に被災した後、7年後に県道渋川吾妻線の南に再建されたが、明治初年に廃寺となる。跡地には、泥流にまれた時の住職の墓があり(写真5)、そこには、「天明三年七月八日」と刻まれている(内山 2001)。

天台宗真光寺の門徒寺で河嶽山福性寺と呼ばれ、川島字後界戸にあったが、再建されたのは、字久保田である。明和元年(1764)の「村絵図」に記されて隣地に「御除地九反七畝拾九歩」と記されている。被害直後の「乍恐以書付奉願上候」(川島・飯塚永吉家文書)には、「天台宗福生寺、洪水之節、寺堂不残流失致、并ニ住僧流死仕候…」と記録される。字久保田の廃寺跡には、「寂源」の墓標が残され、「当院第十四世 法印寂源覚位 天明三年七月八日」と刻まれ、寺と共に非業の死を遂げた住職とみられる。7年後の寛政二年の「宗門人別改帳 上野国群馬郡川嶋村」には、檀家31軒、男67人女41人計108人とあり、「住僧共ニ流失仕候、依之本寺真光寺預り旦那ニ罷成候間、真光寺致代印差上申候」といい真光寺で代印を致すというのである(渋川市市誌編さん

委員会 1993)。真光寺門前には、供養碑が残されているが、このことと繋がりがあるのかもしれない。



写真5 福性寺跡地 一段下の段丘面が天明泥流の到達範囲と考えられる。

S-H 飯塚家靈園前供養石仏

川島字田島218番地にある浅間石は、高さ約2m、横幅約3.5×4mで、石の上には南を仰ぐ10体の石造十王像が安置されている(写真6)。現在、その多くは頭部を失い、あるものは復元されている。これは、浅間焼けによる泥流犠牲者を慰靈するために、流れついた浅間石上に篤志者が造立供養をおこなったと伝えられている(渋川市市誌編さん委員会 1993)。また、飯塚家靈園内には「七月八日」没年を刻む墓標がある。



写真6 浅間石の上に造立された供養石仏

S-I 金井の浅間石と2つのエノキ

金井村の広がった低位段丘上には、天明泥流で運ばれた浅間石が残されていた。2つの浅間石上に生え、太い根が石の表面を四方にはい、それぞれ「上の榎」:(大成工業地内)、「下の榎」:(いまい自動車ボディ、現伊藤園)と呼ばれてきた。樹齢は150年ほどで、周囲は約3.5mといわれたが、現存はせず、写真のみが残されている(渋川市 1986・渋川地名研究会 2001)。

中村(1998)によれば、渋川市指定天然記念物「金井の浅間石とエノキは、現在、指定から解除されている。市の指定になる以前は、もっと大きな岩塊であったとのこと。この浅間石の直上に生えていたエノキは枯れてしまい残っていない。所有者の話では「事務所の玄関先

にありじやまなことから、碎いてかたづけたい」とのこと（1998年2月2日）、と聞き取られている。

S-J 金井村の被害

金井村では、川岸の水勢工事場1箇所、寛保の洪水により田畠に流れ込んだ新川〆切と田圃囲などの被害が報告されている（北群馬渋川の歴史編纂委員会1971）。また、「天明三年浅間山押出 火石入泥押絵図」（元岡岸良一氏蔵 岸益男氏複写）に被せ図でその様子が記されている。勝田治男家文書では、田高は約29町中27町が、畠高は97町中10町が「此度砂泥押入火石入潰地」と記されている。832人中2人の流死者を出し、勘八という人は、二里程下流の半田村で引き上げられて助かったといい、寺社では寺1ヶ寺、神社5ヶ所（八坂神社=金井字天王平1番地、諏訪社=金井甲503、天神社=金井1,081付近、琴平神社=金井村字吾妻山、王子稻荷社=金井忠靈塔前を左に登った土手際にまつられている、金藏寺=真光寺の末寺で金井字西裏1,965は何れも現存）は無事だったと記している。また、降灰の記述は、「当六月廿九日頃より少々も石砂降別而七月二日殊之外灰石砂降諸作ニ毒氣入候…田方之義ハ不及申上粟稗大豆等ニ至迄悉痛申候」という（渋川市市誌編さん委員会1993）。

金井諏訪古墳（渋川市金井諏訪502）の高台を除き、周辺の低位段丘は、金井用水路を境に泥流堆積物の到達縁辺があると考えられる。用水建設に伴った造成の成形を確認しながら用水路の南縁を南東に進んでいく縁辺となる地形を読み取ることができる。絵図に示されているとおり、段上の三国街道と平行するようなラインで到達範囲が確認できる（写真7）。また、天明泥流以前に寛保の洪水により流路変更がなされた痕跡が、天明泥流により埋めつくされ、現在、吾妻川に向かい東に広がった地形となっていること理解できる。

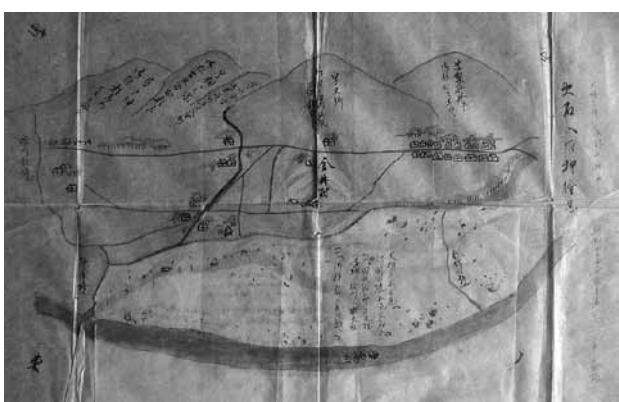


写真7 〔(金井村)天明三年浅間山押出 火石入泥押絵図〕(岸益男氏複写) 絵図上の旧河道が天明泥流により埋め尽くされ現在の吾妻川河道になったことがわかる。

S-K 金井町 流死者墓

高さ45cm、幅35cm。浅間石の自然石の一面を加工し「流死墓」と刻まれている（写真8）。渋川北中学校の東、「金井住民センター入口」の看板を北に入った個人住宅の入口にあり、被災にあった無縁仏と伝えられている。



写真8 金井町 流死者墓 この地点には天明泥流は到達していない。

S-L 並木町 真光寺入口流死萬靈墓

碑身は、高さ123cmの角柱塔で自然石の台石の上に建てられている。地元の人々によって建立されたもので、梵字に続けて「流死萬靈墓」と刻まれ（写真9）、渋川市並木町真光寺墓地入口沿いに建てられている（北群馬渋川郷土博物館2012）。前述した川島の福性寺で扱った、寛政二年の「住僧共ニ流失仕候、依之本寺真光寺預り旦那ニ罷成候間、真光寺致代印差上申候」という住職寺堂宇とともに流された福性寺の本寺にあたる。



写真9 流死萬靈墓 この地点には天明泥流は到達していない。

S-M 信号「金井入口」の北付近～十王堂

国道17号に添って存在する段丘境に添う到達ラインは、国道17号を、現在の信号「金井入口」の北「稲垣」とガソリンスタンドの中間付近で交差していると考えてよいだろう。2012年12月の下水管敷設工事の土層断面では、路盤材の下位に2m以上の天明泥流堆積物が

確認できた（写真10）。さらに、下流側の信号機付近では堆積物がなくなっていることが確認できる。この段差を到達範囲の縁辺としながら、下流方向で、十王堂のある段差へとつながることが確認できる。また、上流方向は、「カワチ」の東側駐車場の段差へと続いていることが確認できる。



写真10 国道17号添いの下水管敷設工事(2012年12月)
写真の工事地点には天明泥流堆積物が認められたが、写真手前の工事地点では天明泥流堆積物は認められなかった。

S-N 天明三年仲春建立の道祖神

渋川総合病院北の平沢川と日本シャンソン館の中位民家集落の辻には、「道祖神 天明三年癸卯仲春吉日」と刻む自然石の道祖神が利根川の方向を向くように佇んでいる（写真11）。「仲春」とは、春のなれば、陰暦二月の別称であるから、建立されて5か月後にこの付近の利根川河道を天明泥流が襲ったことになる。この付近は現在、国道17号のバイパスの開通により地形をうかがい知ることなく通過してしまいがちであるが、この道祖神の場所は微高地となっていることを想起することができ、天明泥流がこの区域には到達しなかったものと考えることができる。



写真11 「天明三年癸卯仲春吉日」と刻む道祖神 この地点には天明泥流は到達していない。

S-O 中村の被害

中村の集落の主要部は、現国道17号東の低地の利根

川沿いにあったが、天明三年に泥流に被災して、西の高台に移った。利根・吾妻両郡から伐り出された材木が利根川へ下り江戸へ輸送されたが、中村にはその中継基地として、南の半田寄りに河岸がおかれた。「旧中村の跡は利根川の沿岸にありしを、今は耕地又は石河原となれり」（「松平藩川越記録」）といい、中村が廃絶した様が記されている。村高の74.9%、土地の74.4%で、村の4分の3の田畠を失った。106軒のうち74軒が流失し、残った家屋は、早尾神社周辺の32軒といい、村人417人中24人が流死している（渋川市市誌編さん委員会1993）。田方被害約22町中の9町、畠方約44町中の43町という（渋川市市誌編さん委員会1993）。

関越自動車渋川伊香保IC建設に伴って、昭和57～58年にわたって発掘調査された中村遺跡や工業用ポンプ設置に伴い発掘調査された中村岡前遺跡の成果から、IC周辺の西側は茂沢川までは到達していないことがわかる。「中村村絵図」（中村区文書）の被害前後の状況を見比べると、現在の前金沢川に該当する付近の泥押が西に突き出ている。この表現を説明するかのように、大同特殊鋼工場の南東付近が低地であったことが推定される。約0.2～2.5mの堆積物下で発掘調査された中村久保田遺跡や中村日焼田遺跡付近がその場所に該当する。また、大同特殊鋼工場の南東の民家付近にも、踏査により段差や堆積物の有無によりその被害地形が確認できる。また、「中村村絵図」で示すとおり、現在の中村三差路周辺の人家や中村早尾神社周辺までは天明泥流は到達していないことが確認できる（写真12）。その上流側は、現在の国道17号に添って存在する段丘境に添って、到達ラインを推定することができる。

「爰に中村といふ所の者泥に流され瀬中を浮つ沈つ漂しが、大木流れ來りしにひらりとのりつけれバ筏に乗りし心地して暫流行所に又二人流來此木に乗り行程六十余里二夜三日流れて銚子の浦に押上げらる。其所の人々大切に介抱致呉漸回復して無恙歸りしハ不思議なる命也。」（「浅間山大変実記」）（萩原1986）という類稀な記述も残されている。



写真12 被害を免れた中村の早尾神社

S-P 中村の浅間石・いすゞ自動車

渋川市指定天然記念物「中村の浅間石」（昭和60年指定）は、およそ東西・南北11m、高さ5m、周囲32mといい、ここより東800mの国道東（いすゞ自動車）にあったものを割って移築復元したものという（写真13）。

現在、渋川市立武道館前の駐車場（渋川市中村835番地）の南東に移築されているが、本来の位置は、渋川インターチェンジ南の私有地内にあり、ここから小ブロックに分断（分割）して移動して組み立てられた。このため、移動の前後を比べると、石塔と鳥居のある地点のピークの高さが、移動後に尖り、相対的に高くなっている。また、長軸方向が移動前にNE-SW方向であったものが、移動後はE-W方向に変わっているという（中村1998）。



写真13 中村の浅間石 渋川市指定天然記念物(昭和60年指定)

S-Q 中村遺跡

中村遺跡は現在の関越自動車道の渋川伊香保インターチェンジの場所に位置し、吾妻川と利根川の合流点から2.5km下流の右岸側に当たる。天明泥流で被災した代表的な遺跡である。この遺跡では、約3mの天明泥流堆積物が堆積している。泥流堆積物の下面には当時の大豆畑がそのままの状態で出土した地点が多く認められ、泥流の侵食力は弱く、堆積作用が卓越していたものと推測される。

S-R 延命寺

延命寺は流され、現在の地に移ったものである。天明三年九月の「中村浅間焼泥流被害届」には、「寺壱ヶ寺流失」とある（渋川市市誌編さん委員会1993）。市指定文化財「文安の薬師」は、現在の延命寺境内の東部にあり、泥流はこの際まで押し込み、薬師の森や石段が2mも埋まったともいい、当時の延命寺は、利根川寄りの向島にあったが泥流に埋まり、天明七年の頃現在の地に再建（写真14）された（渋川市1986）という。境内には、「天明三年七月八日」を刻む個人墓標も残さ

れている。



写真14 再建された天台宗延命寺 この地点は天明泥流到達範囲である。

S-S 半田村の被害と早尾神社

半田村では、130軒ほどのうち30軒が流されたという（北群馬渋川の歴史編纂委員会1971）。現在の半田早尾神社も被災後再建したものである。周辺から北西側は、圃場整備がなされた耕地が拡がっているが、微細な段差などから到達範囲の境界が想定される。半田常法院遺跡（群埋文2011）では、厚さ1mの堆積物の下から溝や土坑などがみつかっている。半田早尾神社は泥流堆積物上に再建されたものと考えられる。この地点の西側には段差（微高地）が認められ、この地点を泥流到達の境界と推定できる（写真15）。スカイテルメ渋川建設に伴う若宮遺跡の発掘調査では、3~4mの泥流堆積物が確認されている。



写真15 半田早尾神社の北西周辺 畑には浅間石の小片が認められる。写真上の畠地奥に微高地が認められ、この地点が泥流の到達範囲の縁辺と推定できる。

S-T 半田嶋村被害

半田嶋村は、9軒42人の小さな村だったが、泥流の

襲来にいち早く真壁、箱田村に避難したことが記されている。利根川に架かる板東橋のすぐ下流付近の場所がその位置にあたるものと考えられる。半田嶋村（写真16）では、「成年ノ溝水」（寛保の洪水）を凌ぐ量の流下だったといい、この災害で、半田嶋は集落ではなくなってしまったと記されている。「松平藩日記」では、「此度利根川変水ニ付、堀数馬殿知行所、半田嶋村百姓共、真壁村箱田村江籠越居候ニ付、夫食等申付け右之趣掛合…」（渋川市 1993）というように、対岸へ避難したことが伝えられている。

「浅間焼吾妻川利根川泥押絵図」（群馬県立歴史博物館所蔵）の利根川中に「半田村家十五斗流失」と記されており、「浅間記」（萩原 1986）で「半田村之内半田嶋ハ八軒ノ村利根河ノ中嶋也。四十二年先辛亥年ノ溝水ニさへ無難ノ所なれども火水流レ来るヲ見て、…それより二時程スギ水もひけ下りけれども…。」と記録されるのは、利根川中州の半田嶋での出来事であった。



写真16 半田嶋村・向島村の推定位置 利根川左岸の坂東築地点から利根川河道を望む。ここに半田嶋村・向島村があつたと考えられる。

S-U 龍傳寺

曹洞宗玉輪山龍傳寺は、南東 200m ほど離れた半田常法院 1,753 番地、「常法院橋」付近の川畔にあったといい、天明の浅間押しで現在の地に移ったという。天明三年の被害や寺由来などが、境内の高塔に刻まれている。開寺は、天正九年といい、寺は、明治 20 年に焼け、本堂は大正 13 年に再建されたものという（渋川市 1993）。参道には、「天明三年七月八日」を刻む馬頭観音がある（写真 17）。天明以前の石造物も多く見られるが、住職に依れば、移転の際に移設されたものだろうという。また、同寺周辺には耕作で邪魔になる不要な浅間石を集めた残礫置き場なども見られる。

「信濃国浅間嶽焼荒記」（萩原 1989）には、同寺住職の記事で、「半田村龍田寺満曉禪寺（師）語れり。半田村藤右衛門と云者家内不残宿に居しに、二丁程川上江泥押來直に家に飛入…二階へ泥押し上ければ、…家の破風より屋根へ登り棟にまたがり取付しが、家はくるりと廻るとひとしくゆらりゆらりと廿五六丁程も其側にて流れ

行きが、岩神村西ニテ大きな火石に当り家は…」と付近の出来事が詳細に書き残されている。



写真17 龍傳寺参道にある「天明三年七月八日」を刻む馬頭観音

(2) 吾妻川・利根川左岸側

S-V 岩井堂城趾と正觀堂

『上野国群馬郡村上村誌』によれば（小野上村村誌編纂委員会 1978）、岩井堂墓が、「岩井堂累主歴代の墳墓、天明三年浅間噴火の時泥土に埋む。後掘って五輪塔を獲たり。応永十四年二月要瀧禪尼と識す者一、その他皆滅す。」、岩井堂城趾は、「東西五十間南北七十五間村西に在り。延久山田為村より数代村上家の居所たり。後下河辺朝村三代居住す。季長に至り觀応中足利義詮に属す。その後村上家之を後す。村上掃部介に至り天正七年七月七日岩櫃城主真田昌幸の臣海野長門守此を攻取る、同十五年白井城主長尾憲景又此を攻落す。天正十八年長尾氏落去城陥る、寛保二年八月天明三年七月再次の洪水城趾を毀し、今僅の趾を存するのみ。」、正觀堂が、「東西九間南北三間四尺面積二十四坪、村西にあり、延久五丑三月山田太郎為村建立、為村は村上氏の祖と村説あり。天正の乱に焼失し享保中興建す。岩下に井の趾あり天明三卯七月浅間噴火の際埋没せり。」と記されている。いづれも、現地を確認することはできないが、国道 353 号の路側帯工事などの断面土層では、アスファルト路盤材の界には、天明泥流堆積物が直に確認できる状況であった。

また、岩井堂墳墓については、明治四十三年の『小野上村郷土誌』「岩井堂城主代々の墳墓にして、天明三年七月浅間山噴火のため泥土焼石にて埋没する。五輪塔土中より数多く出す、文字苔蝕して不明なり、応永十四年二月要瀧禪尼と記すもの一箇、他には梵字で記しあるのみ。」（小野上村村誌編纂委員会 1978）との記述も残されている。

S-W 村上村～小野子村の被害

村上村では、原田支配地が、村高 585 石中有 100 石の泥入、流死 21 人、13 軒の流失、半潰 2 軒などの被害が、

向井金之丞知行所では、高323石中151石が泥入と大久保村名主中島宇右衛門「歳中萬日記」に記されている。小野子村では、田畠計18町5反3畝4歩、中郷村では、田畠合計2反7畝10歩の泥入で済んだが、砂降りが1寸程という（北群馬渋川の歴史編纂委員会1971）。平成17年度特定環境保全公共下水道事業第78工区工事の現場では、最大で地表下4mの管渠工事で天明泥流堆積物は確認されていないとの工事業者からの聞き取り（2005年11月）があり、JR吾妻線を越えた北側には天明泥流は到達していないようである。下流の小野子の断崖地形際では、2009年の法面工事の際に土層断面が確認された（写真18）。



写真18 小野子の天明泥流堆積物断面 写真の矢印間に天明泥流堆積物が分布している。

S-X 道の駅おのこ周辺の到達域

踏査では、周辺の地形から、JR吾妻線を越えた北側の地形変換点までが到達範囲と考えられる。また、周辺では水管の敷設工事などで天明泥流堆積物を確認できる。

S-Y 木の間の流死万靈等

渋川市小野子字木の間の飯塚大学の墓地内にあり、飯塚新右衛門が天明三癸卯星七月初八日と刻んでいる（写真19）。対岸の祖母島村との間には、番所の先の吾妻川に小野子の渡しがあった。この辺りは、川幅も広く、流れがゆるやかであり、杁ヶ橋の関所が洪水で渡れないときも利用ができたという。対岸の木の間から、東の白井宿、北の中山峠、西の村上村へと通じていた。

対岸の祖母島と比較して、高くなっている国道部分へは天明泥流は到達していない。きのこ茶屋付近から、振興にかけてが到達ラインと考えられるだろう。この附近からは、対岸の祖母島が一望でき、断崖地形から、JR祖母島駅沿いに天明泥流の到達域を遠望するのには適している。また、やや外湾するように吾妻川が流れていることも確認できる。



写真19 木の間の流死万靈等 この地点には天明泥流は到達していない。

S-Z 資材置き場前

対岸の祖母島と比較して、高くなっている国道部分へは天明泥流は到達していない。きのこ茶屋付近から、振興にかけてが到達ラインと考えられるだろう。この附近からは、対岸の祖母島が一望でき、断崖地形から、JR祖母島駅沿いに天明泥流の到達域を遠望するのには適している。また、やや外湾するように吾妻川が流れていることも確認できる。

S-AA 横堀字中島

浅間押しの際、流れがこの地までくると、俄に逆流して、分かれて島をつくってしまったともいい、かつて、昭和のはじめの頃は、この中島には、住民もいて耕作がおこなわれていたというが、今は耕作されていない。島半分は渋川市川島分である（写真20）。



写真20 横堀字中島 写真上植生で覆われている島状堆積地(中州)に中島の集落があり、かつて住民が住んでいた。

S-AB 横堀字小原 庚申塚（層塔庚申）

国道353号の北群馬橋十字路から500mほど中之条方面に向かった蓬の沢橋と九連橋の中間に段上に移設されている。九連橋のたもとにあった庚申供養塔は庚申信仰と浅間押しの供養の両方を祀った珍しいものである。

浅間押しから 17 年後に建立されたもので、子持地区で最大の五層塔の庚申塔といわれる（写真 21）。明暦三年（1657）建立のものが、天明泥流で流失、その跡に再建されたのが寛政十二年（1800）建立（安山岩）で、「明暦三年丁酉建之塔天明三年浅間山流失之残此度供養之寄嶋中 維時寛政十二年庚申十一月吉祥日」と刻む（子持村誌編さん室 1987）。



写真21 横堀小原の庚申層塔 天明泥流により流失するが 1800年に再建された。

S-AC 北牧村周辺の被害

北牧村の被害状況は、「浅間山焼泥押記」で、村高 863 石中 460 石被害、男 20 女 30 人の流死、飢人 525 人、本家 147 軒、物置 37 軒、土蔵 21、馬 60 匹と記されている（北群馬渋川の歴史編纂委員会 1971）。また、「天明三年癸卯七月水難流失家数書上帳」には、興福寺、諏訪神社、万日堂などの流失が記録されている（群馬県 1985）。「北牧村武七妻」が八崎村まで流れ、命を救われた（「天明浅間山焼見分覚書」）（萩原 1986）記録なども残されている。

周辺では、現地形から、河原一区に分布する低位段丘面上を流下範囲とができるだろう（写真 22）。現在の落差は写真の様であるが、被災以前の姿を想定し



写真22 河原一区に分布する低位段丘面 この段丘面一帯を天明泥流は流れた。住宅地が分布する一段上位の段丘面には天明泥流は到達していない。

てみると、けい月、農協付近の試掘をおこなった結果で、1.2 ~ 2.0m の天明泥流堆積物を確認していることから、この段差は現在より多少高低差が大きかったと考えられる。

S-AD けい月（試掘地点）

現在けい月（飲食店）が位置する場所（当時畑）で 1991 年に試掘した。この地点で天明泥流堆積物の層厚が 2m 程度であることを確認している。

S-AE 北牧諏訪平 興福寺入口 賑貸感恩碑

津久田村の福増寺の僧金峰が中心となり、文政十一年（1828）頃から建碑の話が始まった。被災 45 年後のことである。安山岩高さ 2.3m、正面 1m、厚さ 40cm で、北牧村興福寺門前の「賑貸感恩碑」は津久田福増寺の僧金峰が、災禍から立ち直った教訓と賑貸に対する恩を呼号して世人の戒めとして建立したという（写真 23）。明治 8 年（1875）4 月 19 日、原敬が新潟から三国街道を群馬に抜けたときにこの碑を見てひどく感激したという（『原敬日記』）（群馬県 1992）。同寺には、村役人名でどこに建設するかの衆議の上、天保二年（1831）十二月の願い書「一札之事」として伝わっており、近世の民政を知る資料として、知られている（子持村誌編さん室 1987）。

当時、近隣のある家では、番頭が「たんなんさん、だんなさん興福寺が流れやんす」というので、主人が「ターコト（戯れ言）をいうな」といいながらも、急いで帰宅し、馬を逃して高い所に避難した（子持村誌編さん委員会 1987）と伝えられていて、時間的な余裕があったことを示唆する言い伝えも残されている。



写真23 賑貸感恩碑 高さ2.3m、幅1.0m、厚さ0.4mの安山岩。奥は興福寺。

S-AF 北牧の渡し

流失した杁ヶ橋の関所（写真 24）に金井村の村役人が手伝大名細川に復旧の届出書「金井村浅間焼泥押後の関所渡船・田畠等復旧届」を出し、金蔵寺大門のところ

にある順悦店を仮関所にすること、杔の仮渡舟は北牧村で引きうけ、渡舟を始めたことなどが記されている（渋川市市誌編さん委員会 1993）。



写真24 北牧の渡し 杔の関所跡を対岸の左岸側から望む。杔の関所は竹藪の裏側に位置する。

S-AG 万日会館寺島家墓石

万日堂が流失した記載は、「天明三年癸卯七月水難流失家数書上帳」に納められている（群馬県 1985）が、用水タンクの建設時には、地中から石の基壇の様なものが出てきたといわれており、これが流失した堂宇の一部であるかもしれない。

会館に隣接する寺島家墓所には、詳しく読み取ることができないが、連名の戒名を刻んだ石塔に、「天明三」「寺島伝兵衛」などのいわれを刻んだ墓標が確認できる（写真 25）。刻まれた由緒は、明治期のものかと思われる。



写真25 万日会館(写真奥)寺島家墓石(写真中央)

S-AH 人助け樅の木・若子持神社

北牧地内の農協から西に向かった国道 353 号線の北脇に高さ 10m 余の高さの樅の木がある。「人助けのかや」、「へだまの木」の呼び名をもつ名木である（写真 26）。樹齢は 400 年を越えるともいわれ、一時は根回り 4m ともいわれている。樹の根方には、石碑があり「記念木人助けの樅（へだまの木）天明三（一七八三）年七月浅間山の大爆発の際溶岩吾妻に氾濫して北牧の地も人

家多数埋没した。その時この木に登った数拾人の命を救う。それより人助けの樅と称する。樹齢約四百数拾年、木の高さ地下に六メートル、地上に約九メートル 昭和三十三年十二月二十二日 長尾村北牧青年義会建之」と刻んでいる。231 年前の災害を語る伝説をもった生き証人としてこの木を後世に伝えようとする行為のあたたかい心根の貴重さを受け取ることもできる。昭和 27 年（1952）5 月 23 日付けの上毛新聞では、県文化財調査委員中曾根都太郎、本多夏彦が調査した「人助けの樅」を史木として県の天然記念物に申請するも指定がなされなかったという（子持村誌編さん委員会 1987）。

この木に登った人たちを、500m 北にある若子持神社裏の竹を切って、筏を組んで助けにいった逸話が残されている（若子持神社のある高台までは、到達していない）（「信州浅間山噴出泥押シ実記」（萩原 1986）。



写真26 人助け樅の木 天明泥流が流下してきた時、数十人がこの木に登り助かったという。

S-AI 北牧河原二区・試掘結果

農協の近くの狩野家では、屋根だけ泥の上に出ていたといい、鴻田家では、畑を 3 尺くらい天地替えをしたと伝える（子持村誌編さん委員会 1987）。周辺の堰沿いには鴻田家をはじめとする集落があったといい、浅間押しにあってからは高台に移動したと伝えられている。渋川北群馬で知られた鴻田北斎は、篤学の士といわれ、漢学、和歌、算学の素養もあったという。生家は、浅間押しで現在の原地区に移転した家で、河原には「本屋敷」の地名が残されている。北斎は明治 10 年に没している。原の上り坂には弟子たちによる石碑が建てられている（子持村誌編さん委員会 1987）。

「人助けのかやの木」より中之条方面に約 30m 行った左側の畑（現在小菅機械土木株式会社の資材置き場）を試掘した結果、約 1.2m の天明泥流堆積物を確認している。

S-AJ 北牧前組 後藤家浅間石の石垣

国道 353 号の朝日屋の北に通る路地に沿う見事な石

垣は、近くの長尾小学校下の耕地整備の際に出てきた浅間石を集め、後藤喜九雄氏宅で擁壁に積んだものという（写真27）。大正～昭和にかけての頃かという。



写真27 浅間石の擁壁 長尾小学校下の耕地整備の際に出てきた浅間石を使った擁壁。

S-AK 尖野

戸鹿野（尖野）地区の百姓の屋敷下まで土砂が打ち上げられ、危うくなったが、押し流される難は免れている（子持村誌編さん委員会 1987）。「白井とがの門左衛門殿門の外へどろ上り申候。それより利根川へ押出し利根川ヲ上ミへ差（着力）上ヶ、…。」（「勢多郡津久田村の万留」）（萩原 1995）といい、津久田村で書き留められた覚書によれば、子持村白井の尖野に泥流が押し上がり、上流へ逆流をはじめた状況が目撃されたと考えてよいだろう。この付近の標高から見れば、要害の地として知られる白井の東西両崖の先端地点へ泥流が乗り上げ、利根川の上流へ増水をはじめたということになる。

S-AL 落合・利根川との合流点

落合は、利根川と吾妻川の合流点であるが、利根川沿いに長い。渡し舟は、耕作船で、近隣の農民以外の通行は禁止されていたという。寛政年間に高山彦九郎は、北牧・南牧の関所通過を嫌い、ここ落合を渡って渋川へ向かっている。吾妻川・利根川の落ち合う落合にも、川除の堤があったが、残らず流されて、その上その場所より利根川の水を 10 町余、大宮姫神社裏手付近まで押し上げ、利根川通りの畠は、前々より欠けていた所がまた欠け落ちたという（子持村誌編さん委員会 1987）。この伝承は、樽の塔ヶ渕まで逆流した史料の記述と一致することになる。

S-AM 塔ヶ渕

「利根川の川上樽村のとうか渕と謂へる所迄サカノボル。…又とうか渕より四十丁斗上迄洪水す。」（「天明浅嶽砂降記」）（萩原 1989）といい、「トウカフチ」は、合流点から 1^{キロ}ほど上流の「塔ヶ渕」で（写真28）、こ

こまで泥流が逆流したといい、距離で四十丁（約 4.3km）、津久田付近まで水流に影響を与えたという記述は、地形図との比較でも納得できる距離を記録したものである。



写真28 塔ヶ渕 利根川右岸を望む。天明泥流はこの地点まで利根川を逆流したという。

S-AN 「筑（津久）田猫」の記述

吾妻川と利根川合流点の出来事についての記述は複数確認でき、大きな現象と関わってくる。「慈悲大平記」（萩原 1989）は、伊勢崎周辺の藩士クラスの記と考えられている史料で、「白井南杢通え三里川上え押上泥溢れ返し川筋の村々筑（津久）田猫八崎真壁広瀬口え泥弐丈余り火石交りに炎々として押掛る」という。「利根卅丁余上りえ流レ」（「浅間記」）（萩原 1986）といい、「猫」は敷島の旧地名で、津久田の下流に位置する。利根川は極端に蛇行しているが津久田までは合流点から直線距離でも 6^{キロ}近くある。



写真29 JR敷島駅構内からの利根川遠望

S-未踏査情報

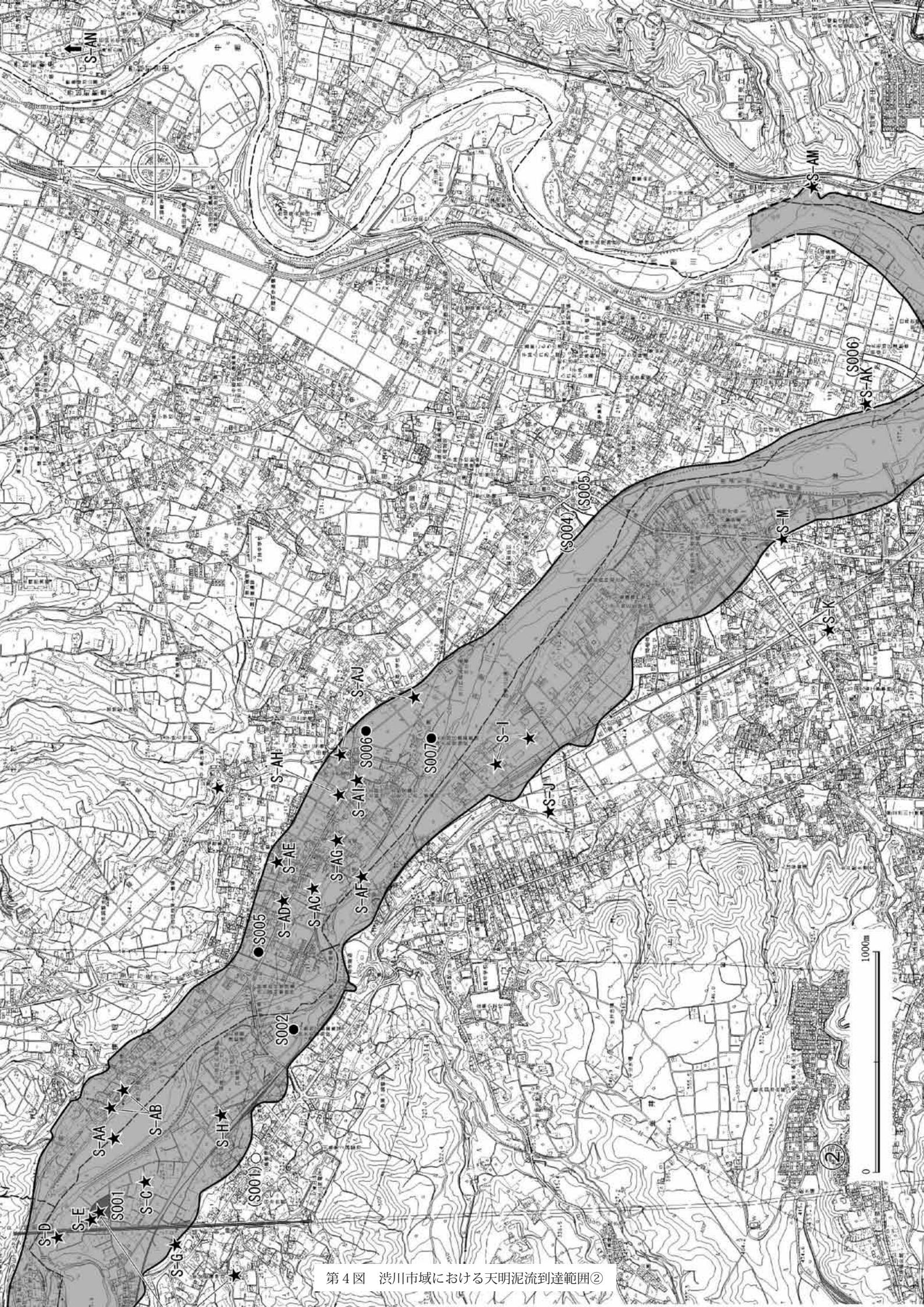
以下については、踏査が及ばなかった地点情報であり、今後の課題としたい。

★真下利藤太開田の功労碑

渋川市中村に生まれた真下利藤太は、「中村開田の父」といわれる。中村河原は天明泥流で 30 町が荒廃し石河原の貧農部落となっていた。当時、「中村に嫁に行くなら裸でバラ背負った方がいい」といわれたほどだった。



第3図 渋川市域における天明泥流到達範囲①



第4図 渋川市域における天明泥流到達範囲②



第5図 渋川市域における天明泥流到達範囲③

県会議員として活躍する中、貧困な村を開拓によってよみがえらせようと、中村耕地整理組合を設立し、土地の払い下げ手続き、資金調達など、村の有志を動員し悲願達成に邁進した。氏の努力が稔り、昭和6年（1931）3月、30町歩の石河原が美田に生まれ変わり植えつけが終わった時、人々は手を握り合い、涙を流して喜んだ、と語り草になっていたと伝える。真下利藤太開拓の功労碑は田園の真中に建てられているという（萩原 1963）。

★中郷 中組 轟木元信家傍ら（文字庚申）

庚申塔（98×82）天明三癸卯姑洗 立野組講中（安山岩自然石）（子持村誌編さん室 1987）。

★中郷西組 寺島家墓標

中郷小西雙林寺境内 寺島家墓地「先祖代々之墓 北牧村寺島伝兵衛 天明三癸卯七月八日 長室妙艶大姉 良雲童子 安室貞心大姉」（安山岩五輪塔）（子持村誌編纂室 1987）。

★北牧後黒井 黒井観音堂

黒井峯遺跡の南断崖を見上げるかの様な場所に建てられた観音堂。馬頭観世音菩薩で、「天明三卯年七月初八日 願主当村関口藤助」と刻む安山岩自然石（子持村誌編纂室 1987）。

★北牧 後黒井 阿久津マケ墓地 石祠

木部神社 旧社天明三年浅間出噴火之際流失 後祠存在今回一家共同再建本社 明治三十八年三月十九日（安山岩）（子持村誌編さん室 1987）。

★白井落合 岸家墓地の石祠

白井落合の岸家墓地の安山岩の総高 81cm の石祠に「天明四甲長歳八月吉日」とあり、浅間押しの供養と考えられている（子持村誌編纂室 1987）。

6. 天明泥流到達範囲図

今回作成した天明泥流到達範囲図を第3～5図に示す。平成25年度までに渋川市教育委員会および公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団等によって発掘調査・試掘確認調査された調査地点を地図上に示した。今回、下図に用いた地図は「渋川都市計画図（渋川地区）」（1:15,000）である。

また、今回、天明泥流到達範囲の推定のために抽出した遺跡の一覧を第2表及び第3表に示した。これら、発掘調査事例及び踏査結果をもとに到達範囲境界の想定ラインを作成した。

7.まとめと課題

渋川市域の吾妻川～利根川分は、およそ 14km の範囲である。国道17号のバイパスの開通により地形をうかがい知ることなく通過してしまいがちとなる場合もあるが、このエリアでは、吾妻川や利根川沿いの幹線道路やJR線路が天明泥流到達ラインに並走することも改め

て確認できた。

渋川市域は、吾妻川や利根川が関東平野に入り、河床勾配の変換点となる場所である。天明泥流の流下現象に際して、合流点での滞留現象など流下の特徴的な出来事に結びつけることができる事例や検証には、遺跡で見つかる試料にも着目されるべきだろう。今回は、それについて考える余裕をもてなかつた。その意味で、今後の資料蓄積にも目を向けられることができれば幸いである。

筆者4人の時間調整をやり繰りしながら踏査の機会を重ねたが、情報に対しても現地を確認できなかつた地点も残され、6つの地点踏査や加除修正は今後の課題である。また、同様な手法で、吾妻川上流域について、確実に記録していく作業を重ねていきたいと考えている。

本域では、依拠すべき文献資料が充実していたこと、渋川市教育委員会の後藤佳一氏に資料提示や表作成をしていただけたことなどにより、精度を期すことができた。記して感謝申し上げたい。

参考引用文献

- 内山信次 2001『上州新四国平成遍路記』上毛新聞社 p.100
- 小野上村村誌編纂委員会 1978『小野上村誌』pp.971、1054-1055
- 北群馬渋川郷土博物館 2012『渋川の文化 真光寺』p.108
- 北群馬渋川の歴史編纂委員会 1971『北群馬・渋川の歴史』p.258、353、355-360
- 群馬県 1985『群馬県史』資料編 13p.732
- 群馬県 1992『群馬県史』資料編 6p.898
- 子持村誌編さん委員会 1987『子持村誌』上巻 p.768、784、785
- 子持村誌編さん委員会 1987『子持村誌』下巻 p.127、921
- 子持村誌編纂室 1987『伝承と路傍の文化』p.78、91、92、95、99、102、126、156、217
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011『阿久津遺跡・万歳寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡・半田常法院遺跡』
- 渋川市 1986『石造物と文化財』pp.257-258、288-290
- 渋川市市誌編さん委員会 1993『渋川市誌』第二巻 pp.233-235、549、711、714、716、652-860、874、877-880、882、903-904、946、1091
- 渋川地名研究会 2001『渋川市の地名』
- 渋川市教育委員会 1997『川島久保内・馬場遺跡』
- 関俊明・中島直樹 2005『玉村町における天明泥流到達範囲』『研究紀要』23 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.85-98
- 関俊明・勢藤力・中島直樹 2013『伊勢崎市・玉村町域(2)における天明泥流到達範囲』『研究紀要』31 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.63-80
- 関俊明・中島直樹・勢藤力 2014『前橋市・高崎市・吉岡町域における天明泥流到達範囲』『研究紀要』32 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.88-101
- 中庄村八 1998『吾妻川流域から失われつつある浅間石の記載保存』『群馬県立中之条高等学校紀要』第16号 pp.15-25
- 萩原進 1963『上毛人物めぐり』上毛警友編集部 p.444
- 萩原進 1986『浅間山天明噴火史料集成II』群馬県文化事業振興会 p.123、159、190-191、203、332
- 萩原進 1989『浅間山天明噴火史料集成III』群馬県文化事業振興会 p.28、67、258
- 萩原進 1995『浅間山天明噴火史料集成V』p.249、257
- 古澤勝幸 1997『天明三年浅間山噴火による吾妻川・利根川流域の被害状況』『群馬県立歴史博物館紀要』第18号 p.88